

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤先生の國家及社會觀
Sub Title	
Author	小泉, 信三(Koizumi, Shinzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.119(465)- 134(480)
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0119

福澤先生の國家及社會觀

小 泉 信 三

福澤先生の國家及社會觀と云ふ題で御話致します。私は福澤先生の國家觀及社會觀に於ける個人主義と全體主義、合理主義と非合理主義（ラシヨナリズムとイルラシヨナリズム）と云ふやうな問題に就て、御話致したいと思ふのであります。

福澤先生の教へとして誰も思ひ出す言葉は、獨立自尊と云ふ言葉である。此獨立自尊と云ふ言葉からして、福澤先生の思想は個人主義、或は個人主義的自由主義であると解することが普通の解釋になつて居ります。此解釋は決して誤つて居るとは言はれない。誤つて居るとは言はれませぬが、併し全部を盡して居るとも言はれないのであります。問題はそれ程簡單ではなくして、まだそれ以上に考ふべきものがあるのであります。先づ御話を卑近な所から進めて行きたいと思ひます。

石河幹明氏の書かれた「福澤諭吉傳」の中に「先生と維新政治家」と題する一編がある。其處には所謂維新の元勳、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、西郷隆盛、後藤象二郎と先生との交渉交際のこと

書いてあります。其中で、先生は唯西郷隆盛を除いた外の人々とは皆交際があり、其或者、例へば木戸孝允、後藤象二郎等とは極く親しい交りがあつた。唯西郷とは面會する機會も、又文通する機會もなかつたやうに書かれてあります。然るに此の先生が會つたこともない西郷隆盛に對しては非常に好意を持つて居られたやうである。先生が特に好意を寄せて居られたのは、西郷隆盛、それから後藤象二郎、此二人であつたやうであるが、然らば西郷の方ではどうであつたかと言ふと、西郷隆盛は福澤先生の著書の愛讀者であつた。かういふと、或は諸君は意外に御思ひになるかも知れませぬが、先生の著作、殊に先生が最も力を入れて書かれた「文明論之概略」と云ふ本を西郷は常に愛讀して、後進生にも之を愛讀することを薦めたと云ふことであります。所が通俗的な解釋に依ると云ふと、福澤先生の仕事は、日本の封建制度の倒壞、封建制度の遺物を一掃すると云ふことに力を注がれた。是が福澤先生の事業だと言はれて居る。一方西郷の方はどうであつたかと言ふと、明治十年の内亂と云ふものは色々の解釋が出来ませうけれども、屢々是は不平士族の反改革運動であると見られて居るのであります。從來の特權を失つた不平士族が再び其特權を恢復しよう、元の状態に立歸らうとする反動運動であると云ふ風に解する者が少なくないのであります。即ち福澤先生は封建制度の一掃と云ふことを生涯の事業とし、西郷の率ゐた士族は明治の革新に對して不平であつて、再び元の状態に立歸らうとする運動を起した。さう簡單には言へませんが、さう云ふ風に解する者が多い。さうすると此二人は全然正反對のことをやつて居

たことになる。にも拘らず、西郷が福澤先生の著作を愛讀して居つた。何處に其説明を求めて宜いかと言ひますと、個人的の愛好と云ふやうなことは姑く別にして、矢張り此兩者の間に確に共通した點があつた。一方は日本の武人の代表者、又一方は自由主義的思想家と言はれる所の福澤先生、此二人の間に強い共通の點があつた。それは何であるかと言ふと、兩者共に熱烈なる愛國者であつたと云ふことこれでありませぬ。

西郷は福澤先生の著作のどう云ふ點を愛讀したのであるか。詳しくは傳へられて居りませぬけれども、西郷の立場としては、日本國の國防論としても、先生の著作を愛讀すべき理由があつたのであります。現に西郷の手紙の中にそれらしい消息が漏らされて居る。西郷は先生の著作を愛國者の著作として、國防論者の著作として愛讀したと云ふ消息が多少漏らされて居る。即ち明治七年の十二月に西郷は其後進の大山巖、後の大山元帥、其當時は大山彌助と言ひましたが、此大山彌助に手紙を與へて、其手紙の中で大山から送つて貰つた本の禮を言つて居ります。其の大山が送つた本の中に福澤先生の著作があつたのでありませう。それに就て禮を述べて居る。其文言を申しますと、「福澤著述の書難有御禮申上候。篤と拜讀仕處、實に目を覺し申候。先年より諸賢の海防策過分に御座候へ共福澤の右に出づるもの有之間敷と奉存候。何卒珍書丈は御惠投奉願候云々」外の點でも先生の著作を愛讀したかも知れませぬが、確に當時最も卓越せる國防論として先生の著作を讀んだと解することは間違でなからうと思ふのであり

ます。此福澤著述の書と云ふのは、此手紙が明治七年でありますから、先程私の申しました「文明論之概略」と云ふものはまだ出て居りません。考證に依りますと、それより前に出た「學問のすゝめ」か、或は「民間雜誌」であつたらうと云ふことでありますが、何れにしても先生の此問題に關する意見は終始變つて居らぬ。即ち其趣意は、「日本國の獨立を全うするには、國を開いて西洋文明を取入れなければならぬ」と云ふ持論が、何れの著作にも強く主張せられて居るのであります。勿論先生の「文明論之概略」と云ふものは、單純なる國防論を以て終始するものではありません、結論に於ては國防論に歸着して居る。文明論の結論として、先生は結局の所は、文明を手段として國を防ぐ、即ち「國の獨立を保つのは文明の外に求むべからず。今の日本國人を文明に進むるは此國の獨立を保たんが爲めのみ。故に國の獨立は目的なり、國民の文明は此目的に違するの術なり」と云ふ思想である。是は先生の何れの時代の著作を取りましても、是と同様の文言に諸君は逢着なさるのであります。

今日の諸君の眼から御覽になると、日本國の獨立の爲に心配すると云ふやうなことは、想像も爲し難いことであらうと思ひますが、幕末から明治の初年に於ける日本の識者の心配は、一に懸つて此一事にあつたのであります。歐米諸國の東漸に對して、日本の獨立を如何にして維持するか、如何にして擁護するかと云ふことが第一の心配であつた。就中其憂を最も深くして居つた一人は福澤先生であつた。亞米利加のペルリが來て日本の國が開かれたことに就いても、先生はこれを開國の恩人だなど思つては

居らぬ。即ち「ペルリが軍艦數隻を率ゐて騒々しく我が海岸に乗込みしは無禮と言ふべし」と云ふことを書いてゐる個處もあるのであります。のみならず、先生は其洋學の知識に依つて、幕府の翻譯官として仕へましたから、當時の外交の事情は詳しく知つて居つた。徳川幕府が外國の壓迫威嚇に遭つて周章狼狽して居つた事實を能く知つて居つた。隨て日本の獨立を憂ふると云ふ念も、他の人々に比較して、特に強く且つ深かつた次第であります。

そこで「文明論之概略」の梗概を御話致すべきであるが、それは諸君に讀んで戴くと云ふことにして、茲には省略します。「文明論之概略」は、先程申したやうに、先生の著作の中で最も力を入れて書かれたもの、一つである。元來福澤先生は其著作に當つては、一般の民衆を啓發すると云ふことを主眼にしましたから、餘りアカデミックな形で著作をすることはせられなかつた。學者が氣を付ける所の出典考證とか云ふことを餘り重んじないで、便利な教科書に基いて著作をせられた場合も随分ある。併しながら唯此「文明論之概略」と云ふものだけは、餘程資料を集め、又入念に考へて書かれたものでありまして、比較的先生の著作の中では最もアカデミックな形を備へたものであります。其「文明論之概略」の結論は、只今申上げましたやうに、「文明を術として、國の獨立を保つ」と云ふことである。一體先生の言ふ「文明」と云ふのは何であるかと云ふと、結局は「智徳の進歩」と云ふことである。「智徳の進歩」と云ふことではありますが、「智」と「徳」とは何れが重いか。何れが重いかと言ふよりも、西洋から學ぶべき

ものは何れであるかと言へば、「西洋人の智慧を學べ」と云ふことに重きを置いて居られたやうであります。「西洋から智慧を學べ」と云ふことを能く言はれたものであります。但、併せて其智徳の進歩は何故に價値があるかと言へば、先生と雖も智徳の進歩はそれ自體として價値を持つたものであると無論言はなければならぬものであります。併し先生は智徳の進歩の爲の智徳の進歩でなくして、もつと其目的を卑近な所に持つて居つた。即ち先程申しましたやうに、「智徳の進歩に依つて國を護る」と云ふ點を強調したのであります。

然らば先生がそれ程に力を入れて説かれた所の「國の獨立」と云ふことは何故に大切であるか。何故「國の獨立」と云ふことがそれ程大切なことであるのか。先生が西洋の本を讀んで、西洋の學問をして、其西洋から學び得た哲學と云ふものが若しあつたとすれば、其哲學は大體に於て啓蒙哲學でありましたらう。即ち理性に基礎を置いた啓蒙主義の哲學と云ふものが、色々の形で先生に影響を與へて居つたやうに思はれる。此の啓蒙哲學の影響を最もはつきり現はして居るものは、先生の「學問のすゝめ」であります。「學問のすゝめ」の開卷第一頁に、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと謂へり。されば天より人を生ずるは萬人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく云々」とあるのがそれである。先生は此啓蒙哲學の影響を受けまして、或る時代に於ては、此啓蒙主義の哲學に依つて、國の獨立の重んずべきことを説かうと試みられた時代がある。即ち「天は人の上に人を造らず、人の下に人

を造らず」と云ふのと同じ思想に依つて、「天は國の上に國を造らず、又國の下に國を造らず」人は個人として對等平等のものであると同じように、國は國として上下の差別はなかるべきものであると、矢張啓蒙主義に基く一種の自然法的論據に依つて、國の獨立の大切なることを説かうとせられたやうであります。例へば先生が西洋の社會契約説を説かうとせられた文言も「學問のすゝめ」の中に見出すことが出来る。政府と人民とが契約を爲して國を造つて居ると云ふやうな言葉もありますが、是も亦同じやうに啓蒙思想の現れであらうと思はれます。

併し斯う云ふ合理主義に依つては、元來一國或は一國民の存在と云ふことを論證することは出来ない筈であらうと思ふ。若し此思想から言へば、平等なる個人と世界との存在は認められる。個人が集つて、國家なき状態よりもより良き状態に入る爲に契約を結んで國家を造るといふ。それは宜しい。それは宜しいが、其の國家と國家とが何故對立しなければならぬか。日本人に取つて日本國と云ふものが何故に大切であるかと云ふことは論證出来ないであります。合理主義の見地から言へば、唯個人が國家なき状態よりもよりよき状態に入る爲に、契約を結んで國家を造つたと云ふことは説明出来ませうけれども、一國の人民が自國の獨立を尊重し、他國の支配を受けない。或は他國人の保護の下に生活を全うすると云ふことを潔しとしないと云ふ此間の消息は、合理主義を以ては説明することが出来ないであります。國民主義、或は國民的意識と云ふやうなものを説明する場合に、學者が屢々持つて來るのは、人種を同

うし、言語を同うし、宗教風俗習慣を同うするものが一國を成し、或は口碑傳説を同うするものが一國を成し、或は過去に於て安危休戚の運命を共にして來たと云ふことに依つて一國を成すと云ふことを擧げる。獨逸の學者は是等の問題を論じます場合に、能く *Schicksalsgemeinschaft* と云ふ言葉を用ひますが、此シツクザールと云ふのは運命でありまして、安危休戚の運命を共にして來た人のコミニテイと云ふことであります。福澤先生もそれに就て同様に「一國民を結合せしむる上に於て就中有力なるは懷舊の口碑を共にして其喜憂榮辱を共にするもの即ち是なり」と言はれて居る。即ち獨逸人の言ふシツクザールスゲマインシャフトでありませう。併し斯の如く喜憂榮辱を共にしたものが、何故に特に其集團の獨立を尊重するか。何故に他に侵されることを肯んじないか。此間の消息を説明するには、人間と人間との關係を手段と目的の關係として見る所の合理主義では足りないであります。其間に何等かのイラショナルなものを持つて來なければならぬのであります。

イラショナルのものを説明することは少しく長くなりますが、簡單な一例を申せば、歐洲戦争の始つた時のことであります。私は當時獨逸に居りまして、戦争の爲に英吉利に逃れました。當時私は社會主義運動に就て興味を持つて居りましたので、獨逸の社會民主黨が此戦争に對してどういふ態度を執るかと云ふことを少し細かく注意して見ました。さうすると此黨は戦争の始る殆ど直前迄は、頻に力強く反戦運動をやつて居つたのであります。所が愈々宣戦が布告されますと云ふと、俄に態度を一變して、

交戦輿論に屈從して、戦争に同意したのであります。英吉利に逃れましてから、私は學校で習つた福田徳三博士の許に、此事を書いて報じたことがある。其時に福田さんは返事を寄越して、無理はない。獨逸社會民主黨の其態度は無理はないと述べられて、「愛國は戀に等しく、共に思案の外に有之候」と書いて送られた。此の思案の外であると云ふことが、即ちイルラシヨナリズムであるといつて好いでせう。計算にも理窟にも合はない、全く思案の外であると云ふのが即ちイルラシヨナリズムである。

諸君御承知の、テンニイスと云ふ社會學者は人間と人間との結び付きを、結び付く爲の結び付きと、或目的を達する手段としての結び付きとの二つに分けて、一方を共同社會、他方を利益社會と言つて居ります。利益社會の最も代表的なものは株式會社で、株主が集つて株式會社を作るのでありますけれども、是は何も株主同志が親愛の感情を持つて居るのでもなければ、又親兄弟の關係にあるのでも何でもない。唯共に利益を營まうと云ふ一つの目的の爲に、手段として結付くのであつて、是が所謂利益社會的關係である。此利益社會の關係に於ては、人々の行動は全然合理主義的に律せられる。即ち經濟學で謂ふ所の最少の費用で以て最大の利益を收めようと云ふ原則は、此利益社會の關係に於て最も明に現はれるのであります。所が吾々の對人關係に於ては、それと違つた又別の關係がある。其最も純粹なのは母親と子との關係であります。即ち母親が子を愛すると云ふこと、子に對して無限の愛着を感じるのと云ふことは、それ自體がそれ自體である。所謂目的手段と云ふ考慮を全く離れて居りませう。此子供

を育て、大きくなつたらどうして孝行して貰はうとか、今可愛がつて置けば損はないからとか云ふやうな打算をして可愛がつて居るのではない。是は株式會社の關係とは全然違つた關係である。此の母親と子との關係程迄には到らない迄も、株式會社に於けると違つた對人關係と云ふものは、色々な形に於て見出すことが出来る。例へば友人の結合是は即ち利益社會的の關係でなくして、共同社會的の關係である。併し此共同社會的の關係に於きましては、先程申した合理主義が通用しないのであります。相手と自分との關係を或目的に達する手段としては見て居らぬのでありますから、所謂一番安い費用で、一番手間を掛けないで、或目的を達しようと思ふラシヨナリズムの原則と云ふものは其處に働いてゐない、勿論吾々人間の關係と云ふものは純粹の關係ばかりではないのであります。母親と子供との關係でも、利害の考慮の全然伴はぬものであるとは言はれませぬが、兎に角吾々の人間的結付きには二つの違つた原則がある。一方は合理主義の支配する關係であり、他方は合理主義の支配出来ない關係である。で一方の關係に於て吾々を支配するものが打算であるとすれば、他の關係に於て吾々を支配するものは傾倒獻身です。又一方の關係を權利を主張する關係であるとすれば、他の關係は義務に服する關係であると言つても宜からうと思ひます。

歐洲戦争が始りました時に、獨逸の經濟學者のゾムバルトと云ふ人——是は色々な意味に於て特色を持つた學者でありますが、此人が *Händler und Halben* と云ふ著作を著したことがある。此ヘンドラー

と云ふのは町人、ヘルデンとは英雄とか勇士とか云ふ意味であります。而して其趣意は、獨逸と英吉利との戦は町人と英雄との戦である。獨逸人と西歐羅巴人と云ふものは全然世界觀を異にして居る。彼等の世界觀は權利を基調とした所の世界觀であり、吾等の世界觀は義務を根柢とする所の世界觀である、と云ふやうなことを頻に強調したものであります。是は戦争當時の昂奮に乗じて書いたものであるから、それに學問的の吟味を加へることは出来ませぬが、ゾムバルトの言ふ所の西歐羅巴の思想と云ふものは利益社會的思想であり、ゲルマン人の思想と云ふものは共同社會的思想であると云ふことを言はんとしたものでありませう。

そこで話が横に外れましたが、詰り人間と人間との關係に此二つの關係があると云ふことは、今日の社會學者は皆申しますけれども、私共の知る限りに於ては、英吉利、亞米利加あたりの著作には餘り此事が説かれて居らぬ。英吉利、亞米利加あたりの社會哲學と云ふものは、大體に於て合理主義的思想の産物である。即ち人間と人間との結付をば、或目的を達する爲の手段としての結付であると見る思想が基調となつてゐるやうに見える。若し假りに西洋の社會哲學は斯様なものであるとするならば、此の西洋の社會哲學を以てしては、どうしても福澤先生に説明の出来ないものがある。何故日本國の獨立と云ふことが、是程自分に取つて大切なものであるか。是は若し先生が西洋の著作に依つて學び得た所のラシヨナリズムが、唯一の正しい哲學であるとしたならば、其哲學を以てしては到底説明出来ないもので

ある。其處で先生は、詰り愛國心とか、報國心とか云ふものは、是は哲學の上から見れば、天地の公道ではなくして私情に過ぎないものである。丁度吾々が親の病氣を心配すると同じやうな私情に過ぎないものである。併し假令私情に過ぎないとしても、吾々に取つては最高の道德である。縦し哲學的には説明出來ずとも、哲學的に辯護出來なくとも、自分は敢て其私情に殉ずる、と云ふことを度々の機會に於て公言せられるのであります。

其一例は諸君も御讀みになつたであらうと思ひますが、舊徳川幕府の家臣であつて、後の明治政府に仕へた勝海舟、榎本武揚、此の二人の人に對して先生が痛烈なる攻撃を加へた「瘖我慢之説」と云ふ著作がある。此「瘖我慢之説」の冒頭の一句は「立國は私なり、公に非ざるなり」と云ふのである。更に引續いて、忠君愛國と云ふことは是は私情に過ぎない。若し世界と云ふ見地、天地の公道と云ふやうなものから見れば、吾々が國を建て、相割據し、相争ふと云ふことは、我々が親の病氣を心配するのと同じことで、是は私情に過ぎないものであらう。併し其私情は吾々に取つては最高の道德であつて、自分は其私情に殉ずるものであるといふ意味の事を述べて居られる。或は又別の機會に於いて、先生は述べて言はれるのに、「天然の自由民權論は正道にして、人爲の國權論は權道なり。或は甲は公にして、乙は私と言ふも不可なし。」だから天地の公道だとは言はれない。而も結論に於て「我輩は權道に従ふ者なり」と言つて居られる。國と國とが對立して、相争つて居る以上は天地の公道など、言ふことは言つて

居られぬ。先生は平和主義を嘲つて、往々痛烈な嘲罵の言葉を發して居られますが、或場合には平和主義を嘲つて、「無慾淡泊公平至極の論なり」と言ひ、或は又世に謂ふ「結構人」の議論である。お人好しの議論であるとも言つて居られる。國と國とが相對立して相争ふ以上は如何なる手段も避けられない。「他人愚を働けば我も亦愚を以て之に應ぜざるを得ず。他人暴なれば我亦暴なり。他人權謀術數を用ふれば我亦之を用ゆ……復た正論を顧みるに違あらず。人爲の國權は權道なりとは是の謂にして、我輩は權道に従ふ者なり」

即ち先生が西洋から學び得た所の社會哲學と云ふものは大體に於て合理主義的社會哲學であつたと見て宜いでせう。其合理主義の哲學の眼から見ると、先生自身の愛國心と云ふものは説明出來ない。そこで先生は是は公道に外れたものである。併し外れて居つても構はないと言はれる。茲に於て、先生の著作の中には屢々猛烈な色彩を以て、イルラシヨナリズムの思想が現れて來るのであります。

勿論先生の思想は複雑であるから、此イルラシヨナリズムを以て一貫して居ると云ふことは言はれませぬ。他の機會に於て、屢々先生の言はれた言葉を拾つて來ると、純粹のラシヨナリズムの見地に立つて、社會論、經濟論を試みて居られることが屢々ある。併し先生の著作を通して見ますと云ふと、猛然として先生のイルラシヨナリズムが處々に現れて來るのであります。

そこでもう一つ申したいことは、前にも云つた通り、先生は吾々の國を愛する情は、恰も父母の病氣

を心配すると同じやうなものであつて、到底理窟では説明の出来ないものである、と云ふことをいはれたのでありますが、それでは福澤先生は何故に此狭い中津の藩を中心としての愛國者にならなかつたか。何故他の藩に對して、中津藩の爲の愛國者とならなかつたか。是は一つは先生の學問識見の然らしむる所でありませう。識見に依つて中津藩以外に更に廣い日本國と云ふものゝあることを早くから認められたからでありませう。併しながら他面に於ては、先生が中津藩の下級士族の家に生れたと云ふことが餘程之を助けて居りはしないか。若し先生にして、中津藩の上流の家庭に生れて居つたならば、或は矢張狭い中津藩の愛國者になつて居つたかも知れないのであります。先生が中津藩に於て不遇な下級士族であつたと云ふことが、早く先生の眼を藩の外の世界に注がしむると云ふことに餘程力があつたのではなからうかと思ひます。

偕、斯の如くにして、藩の外に日本國ありと云ふことを知つた先生の眼に第一に映じたものは、平民の無智無氣力と云ふことであります。こんな無智無氣力なる人民に日本國を託して安心することは出来ない。眞に日本國の獨立を保たうと思へば、どうしても氣力あり、智力ある國民を養はなければならぬ。即ちそれが爲に書かれたものが「學問のすゝめ」であります。「學問のすゝめ」は日本民衆の智力と氣力を振ひ興さしめて、以て國を護るの實力ある國民を作り上げようと云ふ趣旨で書かれたものであります。諸君は獨逸の哲學者フイヒテが、プロシヤ國民がナポレオンの爲に征服せられて、最も悲慘なる情

況に沈淪した時に、伯林大學に於て「獨逸國民に告ぐ」と云ふ十四回の大講演を試みたことを御承知でありませう。其フイヒテは其講演に於て、要するに獨逸の復活と云ふものは新しい教育に依つて新しい國民を作るより外に方法はない。それが獨逸が復活する所の唯一の途であると説いた。先生も亦歐米勢力の東漸に對して、安全に日本國の獨立を確保するには、氣力あり智力ある國民を作らなければならぬと主張される。即ち先生の「學問のすゝめ」の著作ある所以であります。

それで結論に入りますが、先生の努力せられたことは前述の通りであります。先生の生涯を通じて、先生を最も喜ばしたものは何であるかと言へば、明治二十七八年の日清戰爭の勝利でありませう。此日清戰爭に對しましては、「愉快とも有難いとも言ひやうがない。命があればこそこんなことを見聞するのだ。前に死んだ同志の朋友が不幸だ。あゝ、見せてやりたいと毎度私は泣きました」と云ふことを自傳の終りに書いて居られる。之には一字も加へる餘地がなからうと思ひます。日清戰爭後約十年にして日露戰爭が來ましたが、其三年前に先生は既に没せられたのであります。不幸にして先生をして日本海々戰の勝報を知らしめることが出来なかつたのであります。學者思想家としての福澤先生は、其生涯に於ける苦心努力と云ふものは非常なものであります。併し又一面に於て酬いられる所も随分大きかつたと言つて宜しいのであります。と云ふのは先生が書かれました「學問のすゝめ」或は其後に出た「文明論之概略」以來二十年三十年の間に、日本國の獨立と云ふことに就ては、最早何人も憂ふることを要

せぬやうになつた。先生が第一に心配して居つた所の日本國の獨立と云ふことは、最早誰も心配する者がなくなつたのであります。でありますからして、種々の細かい點に付ては、先生も色々な不滿を持つて居られたかも知れませぬけれども、又働くことも大に働かれて非常な苦心をせられましたけれども、大體に於て先生は恵まれたる思想家として、最も幸福な生涯を送られた人であると言つて宜からうと思ひます。先生自ら其事を言はれまして、晩年になつて先生自ら自分の事業の成績を顧みて、「法螺を吹き當てた」と言つて満足し、又「自分の過去を顧みれば遺憾なきのみか愉快なことばかりである」と書いて居られますが、是は僞らざる有りの儘の眞情であつたであらうと思ふのであります。

先生は無論個人の權利と云ふことを高唱した人でありますから、其意味に於て個人主義者と見ることは誤りではないのであります。併しながら同時に又最も強く國家國民に對する義務と云ふことを高唱した人であることは先程來御話した通りであります。然るに世間通俗の解釋は多く唯前の一面に於てのみ先生を見て居るやうでありますから、今日は特に後の一面に就て御話をした次第であります。國民をして國を護り、國を愛せしむる爲には、唯徒に愛國家になれ、愛國者になれと言つて説教するだけでは其目的を達し得るものではない。國民をして眞實に國を愛せしむる爲には、其國を彼等自身の國にしなればならぬ。自分の國として之を愛せしめなければならぬ。是が即ち福澤先生が、終生個人の不羈獨立と云ふことを高唱して、封建的卑屈を攻撃するに最も力を盡された所以であらうと思ひます。